



言葉はむずかしい

ことば

常盤新平
ときわしんべい

川端康成の『雪国』の、アメリカ人の手になる英訳を読んだ女性が「とてもいい翻訳ですね」とほめた。会議通訳をつとめる彼女は、もちろん、学生のころにこの名作を読んでいる。外国人で日本の小説を一般の日本人以上に理解して英訳できる、優秀な翻訳者が出てきたのだ。

私は長いことアメリカの小説やノンフィクションを翻訳してきたが、日本語を英語に翻訳するのは、いまだに苦手である。しかし、日本の小説を読みながら、これを英訳したら、どんなものになるかと考えることがある。英訳しても、いい小説だろうか、英訳したらつまらないものになるだろうと自分で勝手に判断する。

時代小説は英訳ができるのだろうかと思っていたら、池波正太郎の『仕掛け人・藤枝梅安』の英訳が出た。さっそく読んでみると、英文にスピードがあって、読みやすく、しかも面白い。ちなみに、仕掛け人というのは、大金をもらって殺人を請負う殺し屋のことだ。

会議通訳の女性は、「日本の小説を英訳と読みくらべると、いろいろと勉強になる」と言った。日本語の微妙なニュアンスが英語によって、はっきり理解でき

ることもあるそうだ。「アメリカやイギリスの小説の場合、その翻訳に目を通してから、原書を読むこともあります」と彼女は言った。「ただし、日本語と英語で2度も読むのは、いい小説に限りますね。それが勉強になるのですから、ありがたいことだわ」

「ところで、日本語独特の表現があるでしょう」と私は言った。「たとえば、80の手習いだとか」

「そういうのはわりと簡単ですよ」と彼女は笑った。

「私は『学ぶのに遅すぎるということはない』と解釈して、英語になおします」そして彼女は“Never too late to learn”と流暢に言ってみせた。

彼女はあるとき、アメリカ人の通訳をつとめて、彼女の通訳を聞いた日本の企業の幹部は「そう実もフタもないことを言われてもなあ」とこぼしたそうだ。

「同じ断わるにしても、日本語にはいろんな言い方がありますからね」と彼女は言った。「英語のほうが単純なのかしら」

「そんなことはない」と私は自分の経験を話した。「英語にもいろんな表現があります。きっとそのアメリカ人は率直だったんでしょ」。私にとっては日本語も英語もむずかしい。ものを書いていると、それを身にしみて感じる。それが毎日のことだ。

(翻訳家、小説家)
ほんやくか しやうせつか